

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした 学生の体験的な学び

— 実習記録における振り返りから —

松原 敬子¹ 植草 一世¹ 金子 功一²

Experiential learning of students using “the competences to be obtained by the end of early childhood” as an index of learning

— From the review in the practical training record —

MATSUBARA Keiko UEKUSA Kazuyo KANEKO Koichi

保育者養成において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、学生の学びを深めていくには、自然教育に有効とされるビオトープを活用した体験活動を重ね併せていくことが有効であると、先行研究により示唆された。

本稿では、実習のエピソード記録として記述されている「印象に残ったこと」について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にしたアンケート調査を取り入れ、客観的に「印象に残ったこと」を読み返したことにより、さらに学びを深めることができた。また、実習の総括において「自己における課題」では、明確に自己の課題が記述されており、改めて学生は保育者としての専門性を向上させていかなければならないことの意識化が示唆された。

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、実習、エピソード記録、保育者養成、保育者の専門性

1 はじめに

植草ら(2018・2019)は、U大学・短期大学で行ってきた保育者養成における多様な授業や行事(活動)について検討した。学生が子ども理解とそれを踏まえた保育の展開を促す意味で、多様な授業や行事(活動)を工夫することの意義が明らかになった。また教員間では、こうした授業や行事(活動)は、学生の多様な学びの中でも、特にインクルーシブ保育の学びに繋がり、授業に体験的活動を取り入れることの大切さを共通理解することができた。

実際、植草ら(2020)では、森の遠足や行事実習、ポッチャ大会の各体験的活動において、学生が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下:「10の姿」)を理解させる方法やその授業方法について検討を行った。その結果、学生自身が各体験的活動を

通して子どもに身につけさせたい「10の姿」を学修していることが示された。

また、先行研究では、自然教育に有効とされるビオトープを活用した体験活動を通して、「10の姿」を学生がどのように学んでいるかを検討した。

そこで、本稿では、保育実習Ⅱ(保育所)の実習記録簿における「印象に残ったこと」に焦点を当て、「10の姿」を学生がどのように学んでいるかについて検討していくことにした。

さらに、今後に向けて「自己における課題」を明確にすることにより、学生が保育者としての専門性を向上させていく意識化について、検証することを目的とする。

1 植草学園短期大学こども未来学科

2 植草学園大学発達教育学部

2 実習記録における「印象に残ったこと」について

本学における実習記録簿については、時系列の記録に加え、エピソード記録が書けるようになるためのステップとして、「印象に残ったこと」を日々記述している。「印象に残ったこと」については、子ども理解を深めていく視点を養うため、短大の2年間で成果が得られるよう、1年次「保育実習Ⅰ（保育所）」・2年次「教育実習Ⅱ・Ⅲ」「保育実習Ⅱ（保育所）」において、2012年より同様のフォーマットを使用している。日々の記録に抱く負担感を軽減させ、主体的な学びや気づきにつながる実習になるよう、実習指導の充実を図ってきた。

そこで、2年次前期に行われた「保育実習Ⅱ（保育所）」が終了した直後の事後指導に加え、後期の開始時期に実習の振り返りを再度実施した。日々の「印象に残ったこと」の記述から、「10の姿」を指標にし、当てはまる項目に内容を書き出し、学生の意識化が図られているかを検証することにした。

【実習の概要】

1年次

「教育実習Ⅰ」

・特別支援学校参観実習：2020/9/14～9/15

※新型コロナウイルス感染症拡大のため、学内演習として実施

・附属園における観察・参加実習：10月～12月
(1日)

「保育実習Ⅰ（保育所）」：2021/2/8～2/22
(2週間)

2年次

「教育実習Ⅱ・Ⅲ」：5/17～6/6（4週間）

「保育実習Ⅱ（保育所）」：7/2～7/14（2週間）
選択

「保育実習Ⅲ（施設）」：7/2～7/14（2週間）
選択

「保育実習Ⅰ（施設）」：9/6～9/17（2週間）

※新型コロナウイルス感染症拡大のため、学内演習として実施

3 方法

3-1 調査時期：2021年10月7日

3-2 調査対象者：U短期大学2年生73名

3-3 調査内容：「実習記録簿の『印象に残ったことから』に『幼児期までに育ってほしい（10の）姿』について、具体的に記入ができましたか？特に印象的に記録したエピソードを書き出してください」という教示文のもと、自由に記述させた。

3-4 倫理的配慮：調査にあたっては目的を説明し、調査結果は論文執筆においてデータとして使用するが個人の匿名性は守られること、回答は本調査以外には使用しないことを口頭で説明した。なお、調査への参加は自由意志であることを加えて説明した。本調査で得られた回答を分析する際は、植草学園短期大学の倫理規程に基づいて行った。本調査で得られた回答を分析する際は、個人情報の取り扱いに十分に留意した。なお、調査用紙は、調査対象者が回答終了後、その場で回収した。

3-5 分析方法：本研究では、KH Coder (Ver. 3. Alpha.13) を用いることで、分析者の恣意的・主観的な解釈を極力排除し、客観性を確保しながら学生の自由記述における全体的な傾向を捉えることとした。実習という体験的な学びを通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい（10の）姿」がどのように身についたかを分析した。

4 結果と考察

(1) 「印象に残ったこと」の振り返りから

最初に、73名の記述内容をテキストファイル化し、KH Coderに読み込んだ後、前処理を実行及び文章の単純集計を行った。その結果、総抽出語数は21,594語、異なり語数（何種類の語が含まれていたか）は2,238語であった。これらの頻出語における上位20語とその出現頻度を表1に示す。

次に、テキストファイルの各行に1件ずつ入力された記述を読み込み、テキストから自動的に語を取り出し、頻出語を確認した上で、それらの語の共起関係を探した。その結果、図1のような共起ネットワークモデルが算出された。なお、分析にあたって、出現数による後の取捨選択に関しては、最小出現数20に設定した。図1は、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語(Node)の色分けは、「媒介中心性」によるものであり、色の濃いものが中心性の高さ

表1 「印象に残ったこと」の記述に関する頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	子ども	137	11	一緒	32
2	自分	107	12	同志	30
3	遊び	106	13	ルール	28
4	保育	92	14	様子	28
5	玩具	51	15	表現	28
6	先生	45	16	身体	26
7	友達	45	17	片付け	25
8	クラス	43	18	練習	25
9	言葉	42	19	ブロック	24
10	気持ち	34	20	絵本	24

関連している。なお、図1に示した共起関係における学生の記述は、筆者らが記述の一部を要約した上で、分析データとして使用した。

学生の記述における共起ネットワーク分析を行った結果、図1のクラスター①では、「10の姿」の中で「1. 健康な体と心」「7. 自然との関わり・生命の尊重」を中心とする記述内容がまとまっていた。“朝の会で音楽に合わせて踊ったり身体を自由に動かしたりして楽しむこと”の「身体—動かす」や“園庭で虫や花などを探し触れて感じる中で優しく

触ったり命を大切にすること”等の「虫—探す—園庭」という語を中心とする記述が見られた。学生は子どもたちとのかかわりの中で身体を動かしたり自然と触れ合ったりする大切さを感じていることが示された。

クラスター②では、「10の姿」の中でも「6. 思考力の芽生え」「9. 言葉による伝え合い」を中心とする記述内容がまとまっていた。“子どもたちで遊び方を考え、遊びのルールをどうやったら友達に伝わるかを工夫していたこと”の「遊び—考える」や“保育者の方から一人ひとりに合った言葉がけの大切さを学んだこと”等の「言葉—伝える」という語を中心とする記述が見られた。

クラスター③では、「10の姿」の中で「3. 協同性」「8. 数量・図形・文字などへの関心・感覚」を中心とする記述内容がまとまっていた。“子どもたちは“おにごっこ”や“ドッジボール”などのルールのある遊び(ゲーム)ではきまりを共有しながら遊んでいたこと”等の「ルール—ゲーム」や“責任実習で制作を行った際、飾り付けできる数は1人3つまでと数えながら、のりで貼っていたこと”等「形—貼る」という語を中心とする記述が見られた。

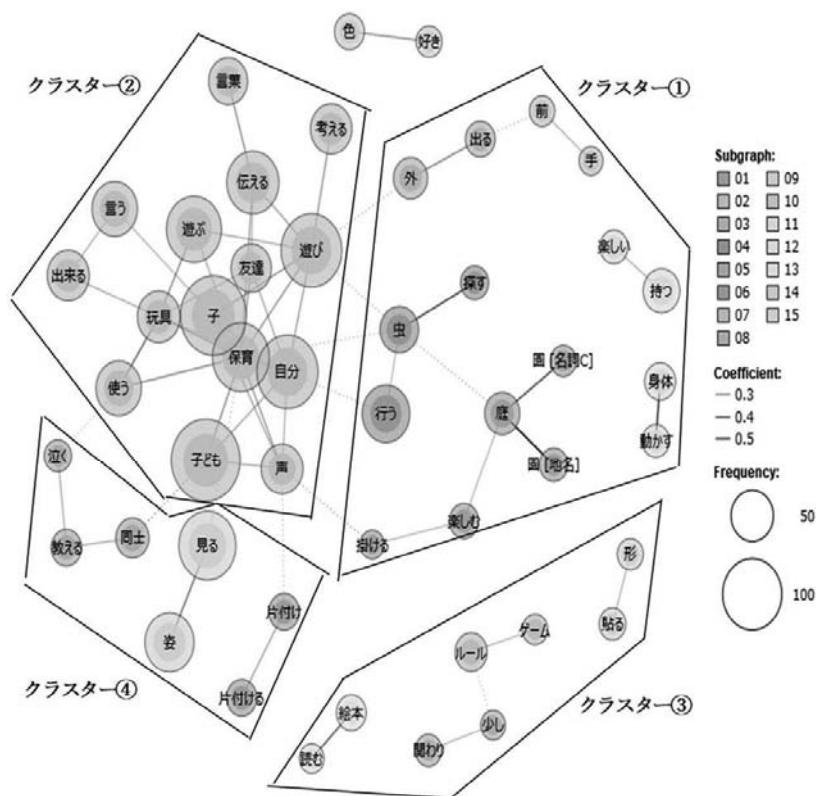


図1 KHCoderの共起ネットワークモデルによる分析結果

クラスター④では、「10の姿」の中でも「2. 自立心」「3. 協同性」に関する記述内容がまとまっていた。“年上の子が年下の子に優しくゲームのルールを教えていたこと”等や“遊びの時間が終わった後、子どもたちみんなであそんでいた玩具を片付けようとしていたこと”等の「教える—見る—姿—片付け—片付ける」という語を中心とする記述が見られた。

また、以下の事例は、「印象に残ったこと」について記述した実際の内容である。

事例1は、生き物についての記述であり、「⑦自然との関わり・生命尊重」について理解している。子どもの自発的な遊びを感じ取ることができている。

事例2は、図形についての記述であり、「⑧数量、図形、文字等への関心・感覚」について理解している。保育者の説明の仕方により、子どもたちの行動が速やかに変容すること等、観察眼が養われていた。

事例3は、表現についての記述であり、「⑩豊かな感性と表現」について理解している。子どもたちの素直で純粋な心が表現につながることや保育者が発信する言葉の伝え方が重要であると学んでいる。

実習中には「印象に残ったこと」について、「10の姿」を意識して記述していたのではないが、今回の振り返りにより、「10の姿」と結びつけることができた。

事例1 タイトル：遊びから遊びへ

戸外遊びの時間に、ある男が園庭でカエルを見つけていた。その子は、見つけたカエルを手に取り、図鑑のページを開いて「これは、ニホンアマガエルだ!」と興味津々な表情で見ていた。その姿から、子どもたちは、遊びからさまざまことを学び、それを違う遊びの中で深めながら、たくさんのことを吸収しているのだと感じた。

事例2 タイトル：線引きの説明

今日は、線を描くということをした。その時の先生の説明がわかりやすく、丁寧で印象に残った。

花の線をつなぐというものだった。先生は、全員に花を確認してから線を描き、終わった子は、折ってカバンに入れ、戻ってくるという流れであった。子ども

が全員カバンの中に入れて戻ってきたら、もう一度子どもたちに声を掛けて、先生に注目するようにしていたのを見て、一つの行動が終わり、もう一度説明をしたい時には、全員で合わせるとやり易く、子どもたちも何を行う時なのか、わかり易いと実感した。

事例3 タイトル：子どもたちの素直な心

今日の活動で平均台を行った際に、先生が「カニさんになって平均台をやってみようね」と言っていたのを聞いていた子どもたちは、手をピースにしてカニになり、平均台を行っていたことが印象に残った。

私たち大人は、カニになってやってみようといわれたら、ただ横向きにカニ歩きをするだけで、手をピースにしてカニのハサミまで真似しようとは思わない。子どもたちは、本当に素直にカニを受け入れてカニになろうとしていたのを見て、素直な心だと思った。

(2) 「自己における課題」について

最初に、短大生73名の自己課題のみの記述内容をテキストファイル化し、KH Coderに読み込んだ後、前処理を実行及び文章の単純集計を行った。その結果、総抽出語数は10,001語、異なり語数(何種類の語が含まれていたか)は1,127語であった。これらの頻出語における上位20語とその出現頻度を表2に示す。

表2 「自己課題」の記述に関する頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	子ども	154	11	対応	18
2	保育	116	12	部分	17
3	実習	89	13	責任	17
4	自分	69	14	気持ち	16
5	大切	41	15	反省	16
6	積極	31	16	疑問	15
7	行動	30	17	保護	14
8	先生	30	18	言葉	13
9	理解	24	19	指導	13
10	課題	23	20	連携	13

次に、テキストファイルの各行に1件ずつ入力された記述を読み込み、テキストから自動的に語を取り出し、頻出語を確認した上で、それらの語の共起関係を探索した。その結果、図2のような共起ネッ

トワークモデルが算出された。なお、分析にあたって、出現数による後の取捨選択に関しては、最小出現数20に設定した。図2は、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語(Node)の色分けは、「媒介中心性」によるものであり、色の濃いものが中心性の高さに関連している。なお、図2に示した共起関係における学生の記述は、筆者らが記述の一部を要約した上で、分析データとして使用した。

「自己課題」について、学生の記述における共起ネットワーク分析を行った。

図2のクラスター①では、“今後の課題は視野を広く、見方を変えて行動できるようにしていきたい”などの「今後—反省—課題」や“保育者間の連携の大切さがわかった”などの「保護—支援—連携」、 “子ども一人ひとりを見て、その子にあった援助をしていきたいと思った”などの「一人ひとり—援助」、 “実習を通して、臨機応変に対応する大切さを学んだ”などの「指導—対応—足りる」という語を中心とする記述内容がまとまっていた。実習は評価される立場にある学生達は、実習を通して深く自己省察を行い、自分自身の力量を見極め、今

後に生かしていこうとする謙虚な姿勢が伺われることが示唆された。

クラスター②では、“保育実習を通して、疑問に思ったことを率直に聞く大切さを学んだ”などの「疑問—聞く」や“子どもの興味(意欲)を尊重しながら、子どもの意識を向けられるようにしたい”などの「たくさん—意識—持つ」、 “実習時、積極的にかかわり、質問することを意識したため保育者にほめて頂いた”などの「積極—質問」を中心とする記述内容がまとまっていた。

クラスター③では、“報告・連絡・相談をするなどの姿勢の面で、自分自身より努力が必要だと感じた”などの「必要—良い—自身」や“子どもにとって「遊び」は大切だが、その前提に「安心・安全」を守らなくてはならないと感じた”などの「子ども—保育—実習—思うなど」を中心とする記述内容がまとまっていた。

クラスター④では、“保育者として現場に出ていくために、子ども一人ひとりを理解し、少しの変化にも気づけるようになることが大切だと感じた”などの「現場—部分」や“実習時の記録簿では、実習生の「動き」や「気づき」の部分で、気づきの部

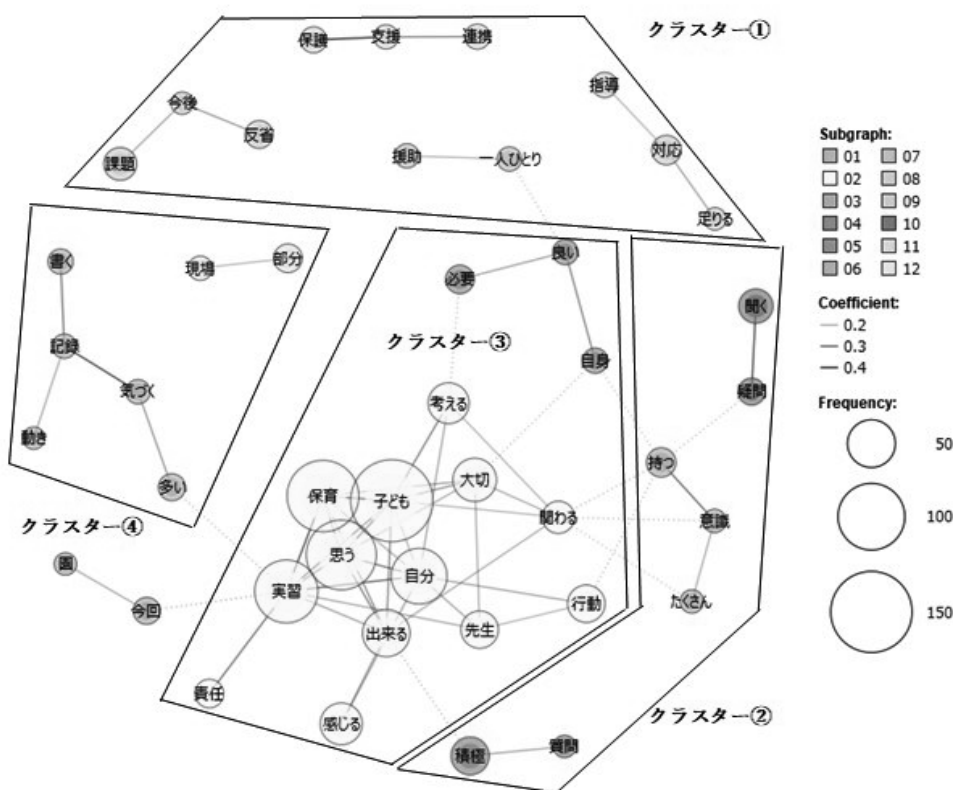


図2 KHCoderの共起ネットワークモデルによる分析結果

分を多く書いていたが、子どもがなぜその行動をしたかななどを丁寧に記載する大切さを感じた”などの「動き—記録—書く—気づく—多い」を中心とする記述内容がまとまっていた。

今回の調査では、実習生が「自己における課題」を明確化するという学習過程を通して、保育者としての専門性を高めるための気づきを深める可能性が示唆されたと考えられる。

5 まとめ

「10の姿」については、1年次より体験ごとにアンケート調査を重ね、意識化を図ってきた。今回、実習直後の振り返りに加え、再度実習の事後指導を実施した際、「10の姿」を指標にしたアンケート調査を取り入れ、客観的に「印象に残ったこと」を読み返したことにより、さらに学びを深めることができた。

また、実習の総括としての「自己における課題」では、明確に自己の課題が記述されており、学生が保育者としての専門性を向上させていかなければならないと、改めて意識化が図られていることが示唆された。

保育専門職を目指す学生においては、実践の場での経験が自己変容につながり、自己開花していくための大きな自信となっていく。保育現場との連携は、何よりも不可欠であり、学習意欲をもたらす実習は、保育の質の向上にもつながっていく可能性が大いにある。多様な保育が実践されている保育現場においては、実習教育の可視化が求められていくのである。

今後は、保育者の専門性を高めていく養成教育のあり方において、体験の学びをいかに理論と結びつけていくことができるかが課題となる。

謝辞

本研究は、2021年度植草学園短期大学共同研究の助成を得て実施しました。ここに記して、感謝いたします。

参考文献

- 1) 植草一世・佐藤慎二・中澤潤他8名(2019). 保育者養成短期大学の多様性を見据えた授業や行事(活動)の取り組み 植草学園短期大学紀要 20, 57-67.
- 2) 栗原ひとみ・植草一世・金子功一・金子智栄子・松原敬子(2020). 園庭におけるピオトープづくりの取り組みから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした学生の体験的な学び:「言葉による伝え合い」について 日本保育者養成教育学会第5回研究大会発表
- 3) 植草一世・金子功一・栗原ひとみ・松原敬子他4名(2020). 学生が体験的に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学ぶための多様性のある授業の意義Ⅰ 植草学園短期大学紀要 21, 37-44.
- 4) 植草一世・金子功一・横田耕明・植草泰憲・松原敬子・栗原ひとみ・早川雅晴・安藤則夫(2021). 学生が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学ぶためのピオトープ活用の意義:附属園のピオトープ作り 植草学園短期大学紀要 22, 13-20.
- 5) 松原敬子・植草一世・金子功一(2021). 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした学生の体験的な学び:園庭におけるピオトープづくりの取り組みから 日本保育学会ポスター発表
- 6) 森知子(2014). 保育者養成実習における学習環境の特性—保育者—実習生関係を考える— 聖和論集 42, 23-30.